

終章 来訪神信仰の現代的意義

浜本 隆志

来訪神から「異人」へ 以上で見てきたように、人間に豊穣をもたらすのみの善なる来訪神がいたが、厄病をもたらす悪霊も存在した。日本でもナマハゲや追儺祭の鬼には、善なる神と「悪なる神」の両面が存在した。また山の上も農耕儀礼の際に、豊穣神と山姥として人間を誘拐する恐ろしい神という両面を有していた。同様にヨーロッパにおける祭りでも、聖ニコラウス祭のクランプスはプレゼントを与える役割と制裁を与える役割という二面性をもっていた。これは自然を具象化したアニミズムの神が、あるときに豊かな恵みを与えてくれる反面、人間に対して自然災害をもたらすものをあらわしていたと考えられる。

さらに人格神もその延長線上において、恵みと制裁を与えるという二面性をもつものとして理解されてきた。スサノオは乱暴狼藉の結果、根の国に追放されるが、八岐大蛇を退治するし、サトウルナリア祭のサトウルヌスも破壊と再生のシンボルであった。人びとは祭りにおける異界との交流を通じ、神や人格神のこの二面性を体験してきた。来訪神信仰はとりもなおさず、世界における正邪、幸福、不幸、生死などの二元論をあらわしたものであり、カオス状態からその統合により調和と再生を生み出すものであったといえよう。

来訪神信仰の伝統は、神話や伝説に裏打ちをされた儀礼や祭りによって連綿と継承されてきた。その意味におい

て、神話や伝説は古代の人びとのコスモロジーを内包する貴重な文化財である。しかしよく見るとヨーロッパでも日本でも、古代の来訪神信仰は祖形を残しつつ、クリスマスや正月の原初的な特性である豊穰と制裁という二面性は、結局、前者のプレゼントだけが残るといふように変形された。このような祭りの変化は、ヨーロッパのみならず文明化した日本や他の各地域にも起こり、もはや時代に合わない儀礼や習俗は衰退する運命にさらされた。いうまでもないが、その進行プロセスは均質的ではなく、文明の中央から辺境の周辺部へとという方向をたどっている。

このように祭りや来訪神信仰は、共同体の結束がゆるみ、いわゆる近代化が進展するとともに神通力を失ってきた。来訪神に対する人びとの絶対的な信頼性が薄れ、かつての歓待される霊であった来訪神は、時代の経緯のなかでそうではなく、しだいに排除や敵対関係の対象となる事例も起きるようになった。

たとえば「ハーメルンの笛吹き男」の主人公は、目立つ色とりどりの服装をして、一見、来訪神のように市民の前に登場する。かれはネズミ退治を請けおい、笛の魔力によって町をネズミの害から救う。あきらかにかれは市民に恩恵を与えはしたが、市民はかれを来訪神とみなさず、胡散臭い「異人」として無視した。その結果、笛吹き男は怒って子どもたちを攫い、市民に復讐をしたのである。

われわれは来訪神の一形態としての「異人」の出現について、ハワイ島の事例も確認した。ハワイの住民にとつてのクツクは、最初、神話に登場する来訪神とみなされ歓待されたが、しかし嵐に遭い舞い戻ってくることによつて、ハワイの住民の儀礼に敵対する外来神となつて、マナがなくなり化けの皮がはがされると、排斥すべき「異人」に変貌して殺害されるのである。

来訪神が変形した「異人」は、共同体の仲間とは違った風采をしているので異彩を放つが、人びとは外見だけで来訪神と「異人」を見分けるのであろうか。また「異人」は来訪神信仰のなかで、どのように位置づけられるの

であろうか。この問題について小松和彦氏は、『訪れる神々』のなかで、次のように述べている。

「来訪神」と「異人」との関係を考えてときに注意しなければならないことは、共同体がそれと接触するとき、その共同体の「富」の変動をもたらすと考えられていた、ということとです。「来訪神」や「異人」は、「富」ないし「災厄」をもたらすわけです。作物が豊作になったり不作になったりする、特定の家が栄えたり衰えたりする理由を、そうした「外部」からの訪問者に結びつけて説明してきたということです。共同体を豊かにするために、あるいは共同体の危機を救済してもらうために招き入れもてなしたけれども、歓待された「神」や「異人」が富をもたらさず危機を救済できなければ、あるいは危機が増大すれば、一転して虐待・排除されることになるでしょう。

もともと来訪神が歓待されるのは、それが善なる神で恵みを与えてくれるからである。来訪神信仰が確固たる時代においては、災害を与える神に対しては、人間に不幸を与えないように、慰撫して障らないようにした。しかし不作が続くと信仰が廃れ、霊的存在が住民にギヴ・アンド・テイクの関係を生みださなくなる場合があった。その際には来訪神は「異人」とみなされ、害悪をもたらすものとして、人びとは排除、抹殺してしまうのである。

小松氏は、今までの来訪神の考察が非常に狭い視野からおこなわれていることを指摘し、時代とともに習俗が変化するファクターの重要性を説いておられる。たとえば日本の民間伝承のなかで、「巡礼とか座頭、山伏、六部といった遊行・放浪の宗教者や芸能者が、旅先で求めた宿の主人に、その所持金のために殺されてしまう」（『訪れる神々』）事例が発生している。これは「異人」から富を掠め取るという、物に執着する人間の本性を示すものであ

るが、来訪神信仰の裏返し事例は、ドライな現代人の本質を垣間見せている。

以上は、来訪神信仰が「異人」として住民と対立したり、敵対したりするものに変貌した具体例である。来訪神信仰から「異人」への移行は、ここでは神への信仰心の欠落と貨幣経済による物への執着に起因していることがわかる。

この問題を中沢新一氏は『緑の資本論』や『対称性人類学』のなかで、視点を変えて、原初の時代に存在していた人間、自然、神などの調和やバランスが取れた世界と、文明化が進み、その世界が崩れてアンバランスになった世界から考察している。中沢氏は前者を「対称性の世界」、後者を「非対称性の世界」と規定し、興味ある分析をする。

「対称性の世界」と「非対称性の世界」 太古から自然界は、誕生、成長、死、再生を繰り返し、このサイクルのなかで連続とした生命の連鎖を継承してきた。生命ある人間や自然界の動植物だけが魂をもっているのではなく、言葉にも「言霊」という魂が宿り、言った言葉のもつ深い精神性が信じられた。そのみならず古代のモノにも魂が存在し、神の意志が宿っていた。魂をもったモノの最高シンボルがタマ（玉）として崇められ、これが天皇家の三種の神器のひとつになったことはよく知られている。

古代の来訪神信仰は、このような素朴なアニミズムの靈魂信仰を根底において成り立っていた。祭りは、一年の季節のサイクルの節目に設定され、先祖霊（神）、人間、共同体の一体化をはかる人間の知恵であった。この調和の取れた生活のリズムによって共同体という小宇宙が成り立ち、それが古代社会の核を形成した。

こうして靈魂を崇める神話の世界では、神と人間は贈与と制裁を介して、「対称性の世界」を築いていた。ここ



図終-1 動物と神、人間の交流、ケルトの大釜の図
(ミランダ・J・グリーン『図説ドルイド』)

では神と人間、人間と動物や植物との交流ができ、霊的存在が相互に結び付ける役割を果たした。それぞれの変身も可能であり、動物信仰や穀物霊信仰が物語るように、これらの交流によって、人間は実りの恩恵に浴すことができた(図終-1)。この問題に切り込んだ中沢新一氏は『緑の資本論』のなかで、次のように述べている。

礼拝や祭りの場に集まった人々の上に降りてくる「霊」が、人々を結びつける愛の力にみち、人々の心を幸福感でみたらばかりでなく、穀物や果実や動物の豊かな増殖をもたらしてくれるという考えは、キリスト教のはじまるはるか以前からある。マルセル・モースの『贈与論』に扱われているのは、ほとんどがこのタイプの「霊」で、贈与の行為がおこなわれるとき、人々の間を流動していくのである。この「霊」は人間の間を流動して、なにかが豊かに膨らんでいく、増殖していくという感情を生み出すが、またそれは神的存在が人間にもたらす賜物に化体(受肉)して、生活を物質的にも豊かにする。

このように「対称性の世界」は、かつて幸せで平和な世界を構築しており、来訪神信仰が信じられ、霊によって豊かな物質的な世界も築かれてきた。人間が狩の対象にした動物は「来訪神」であり、それを鄭重にもてなし、礼節を尽くすことによって、動物は「またの訪問を楽しみながら、動物の霊の世界に戻っていく」（同上書）のである。ところが自我の目覚めから生まれた近代文明は、啓蒙主義、進歩主義、自然科学の発達を促進し、ヨーロッパ文明優位主義を確立した。そこではモノは魂や霊のない単なる物になった。物質化した物は媒介する力を失い、財産をもつ者ともてない者に人間を分離していった。

もてる者はますます物を所有しようと工夫し、技術開発をおこない、自然を改造していった。ヨーロッパの人間中心主義は、自然をも人間に役立つように開墾し、自然を支配しようとした。こうして人間と自然の非対称のアンバランスが生みだされ、豊かになった者は、「未開」や「野蛮」は遅れた蒙昧な状態であり、文明化しなければならぬと本気で考えた。しかしその背後には、人間のさらなる物質の所有欲がみなぎっていた。

スペインは文明化と啓蒙を名目にして、インカ、アステイカ、マヤ文明を崩壊させ、銀をはじめ多くの財産を略奪し、新大陸をキリスト教化した。アフリカをはじめ世界各地で同様な略奪が繰り返された。ポルトガル、オランダ、イギリス、フランスなどもそれに追従し、世界各地で植民地獲得競争を展開した。アメリカも西部開拓と称して原住民を追放したり殺したりして、その土地と財産を奪ったことは、歴史的事実である。

こうして欧米の行動原理は、現代文明の原動力となり、多くの発展途上国もそれを目標にしたが、結果的に森林破壊、植民地戦争、環境破壊、南北問題を引き起こし、大量生産・大量消費の連鎖の構造は、極端なアンバランスを生みだした。中沢氏はその帰結として、「対称性の世界」が崩れ、生まれた「非対称性の世界」を次のように分析する。

「貧困な世界」は自分に対して圧倒的に非対称な関係に立つ「富んだ世界」から脅かされ、誇りや価値をおかされているように感じている。じつさいのところ「富んだ世界」は一極集中化しつつあるから、それに応じてますますこの非対称性はきわだつようになっていく。圧倒的な政治力・軍事力・経済力を存分に行使して、「富んだ世界」は「貧困な世界」を小児化してしまおうとしているから、自分たちの内部に贅沢品や神との直接的な結びつきを汚すさまざまな媒介システムを移植されている「貧困な世界」は、それを屈辱とも冒瀆とも暴力とも感じている。このような圧倒的に非対称な状況は、テロを招き寄せることになるだろう。（『緑の資本論』）

いうまでもなくこれは、アメリカに対して行使された九・一一の「同時多発テロ」の分析である。たしかにヨーロッパ文明の延長線上に、金権主義、軍事力のアンバランス、南北問題、貧富の差という極端な矛盾が生みだされてしまった。弱者の怒りが最終的にはテロをひき起こしたというのである。

「非対称性の世界」では、人間同士、人間と神との関係、人間と共同体、国家同士、南北問題の点において、関係をずたずたに分断してしまった。ここにはすぎましい不毛の荒々しい世界の風景が、われわれの視野に入ってくるのである。だからといって、はげしい怒りや怨念から捨て身のテロや破壊行為に走ることが容認されるわけがない。それはまた復讐の連鎖をひき起こし、ますます泥沼へ足をとられるだけである。そうならないために、人間の繋がりが分断された現代において、もう一度、人間の共同体の原点である来訪神信仰の意味を再検討する必要がある。

来訪神信仰の現代的意義 現代の非対称の時代において、来訪神信仰が昔ながらに復権することが可能であろうか。

二一世紀では来訪神信仰のあり方をどう考えたいのか。現代の日本やヨーロッパにおいて、来訪神信仰を信ずるものは少なく、時代は困難な局面に遭遇している。しかし祭り全体は原型を残しながら、長期的な目で見れば変容してきたとはいえ、クリスマス、正月、ハロウィンなどは世界行事になり、大々的に祝われている。現代人にとっても日常生活の単調なリズムのなかで、祭りのもつ非日常性や娯楽的要素を度外視することはできないからである。

本書で取り上げた季節の変わり目の祭りは、やはり大きな生活の区切りの時空である。たとえ信仰に裏打ちされていないくとも、聖と俗のけじめをつけるという意味において祭りが消え去ることはない。いわば祭りの核心部分が形骸化し、来訪神の神通力が消滅しているとはいえ、祭りの「機能性」が重要視されているのである。現代において祭りの目的や内実が変化し、その「パラダイムが転換されている」ことに注目しなければならない。

現代社会は科学的・合理的にすべてが解明でき、解釈できると信じられ、自然科学が最先端の学問と考えられてきた。その世界観においては、文明至上主義がまかりとおり、未開社会の文化は遅れたものとして見下されてきたが、この思考方法は本当に正しいのであろうか。現代社会でも文明至上主義のものさしで計れないものがある。たとえばレヴィ・ストロースは、「未開社会」の人びとの生活について次のようにいっている。

……オーストラリア、南アメリカ、メラネシア、アフリカにおける綿密な研究が明らかにしたところでは、彼らにとって稼働人口による一日二ないし四時間の労働で、まだ食糧生産に参加していない子供と、すでに引退した老人を含めた家族全員の生存を確保するには充分なのです。現代人が工場やオフィスで費やす時間との、何という違いでしょう。

したがって、彼らを環境の命令に従う奴隷と見なすことはまったくの誤りなのです。反対に、かれらは、農耕民や牧畜民よりもはるかに環境に依存することが少ないのです。彼らがもちうる余暇は、想像の領域に大きな場を与え、外部世界とのあいだにちょうど緩衝装置のように、信仰、夢想、儀礼などのいわゆる宗教的、芸術的活動を挿入することを可能にしているのです。

（『レヴィ・ストロース講義』川田順造・他訳）

来訪神信仰は、ここでいう「信仰、夢想、儀礼」の一部であるが、外部世界とのかかわりあいにおいて、たしかに古代から重要視されてきた。しかし現代文明は「原始社会」を文明化させることで、利益を追求し、かつての生活を破壊し、自然を人工化していった。そしてヨーロッパ型文明は自然や古臭い儀礼をブルドーザのように押しつぶそうとした。そしてもう現代人は、「信仰、夢想、儀礼」などをじっくり考える余裕などなくなった。

だから合理的思考、自然科学万能主義という現代文明からではなく、「未開社会」からしか反植民地主義、現代文明批判という奥深い思想的意味が問い直すことができなのではなからうか。同時にその視点から、来訪神信仰や祭りのもつ本質的な意義の再検討がなされねばならない。

レヴィ・ストロースは『悲しき熱帯』の日本語版の冒頭メッセージのなかで、示唆的なことを述べている。

『悲しき熱帯』を書きながら、人類を脅かす二つの禍——自らの根源を忘れてしまうこと、自らの増殖で破壊すること——を前にして不安を表明してから、やがて半世紀になろうとしています。過去への忠実と、科学と技術がもたらせた変革のはざままで、おそらくすべての国のなかで日本だけが、これまである種の均衡を見出すのに成功してきました。

日本が多神教に根ざし、「自ら増殖」してきたヨーロッパ文明の一神教とは異なった文化をもっていたことは事実であるにせよ、またかれが日本文化を過大評価しているくらいはあるにせよ、ここにはヨーロッパ文明がもたらせた負の問題を冷静に観察している目がある。

レヴィ・ストロースのいう「自らの根源」のひとつである来訪神信仰が、日本の東北、北海道、そして鹿児島、沖縄にかりうじて残っており、さらにフィリピンや太平洋の島々、イヌイットの居住地域にも継承されている。いやヨーロッパにおいてもこれは、アルプスやチロルの山岳地帯、バルト三国などにも認められる。文明化や都市化とはもつとも離れた辺境の地に、「自らの根源」を忘れない人びとの魂が息づいているのである。

本書のテーマはこれらの過去の儀礼の調査という視点だけでない。そのみならず文明と未開、「非対称と対称の世界」という新しいパラダイムにおいて、来訪神信仰を再評価することが重要なのである。この点に現代における来訪神信仰研究の意義があるといえよう。宮沢賢治の文学の世界は人間が宇宙の個でありながら、つながりあっているという壮大な対称性の宇宙観によって組み立てられている。これは来訪神信仰と同根のコスモロジーであり、現代において宮沢賢治が人気のあるゆえんである。

文明がいくら発達したとしても、人間の死は避けられないし、病氣、不幸はいつ襲ってくるかもわからない。他界した親しいものの靈魂は、絶えず残されたものに語りかけてくる。また残されたものは、その靈に語りかけずにはいられない。それによって生きるエネルギーを与えられ、癒される。生と死の循環が生命あるものの宿命であるかぎり、宗教は消滅しないし、来訪神信仰も変容を遂げながら生き続けるであろう。

現代文明の危機を乗り越えるためには、日常と非日常との関係から、すなわち靈を媒介とした視点が不可欠になる。ここから壊れた共同体の再構築やそれを核にした「世界秩序の創設」を目指すポジティブな展望も開けるので

はないか。

繰り返しになるが、原始的な祭り、自然への畏敬の念は、本来の人間の知恵であり、心のふるさとである。その野生の原点に返り、「未開の人びと」が守ってきた祭りの復権とその意義を再確認することが、現代文明を照射する意味において、またずたずたにされた共同体を再生するために、さらに人間の魂にとつての未来のあり方を問う意味において、アクチュアルな座標軸になるのではなからうか。

参考文献一覧

- ミランダ・J・グリーン 『図説ドルイド』 井村君江監訳 東京書籍 二〇〇〇年
小松和彦編 『日本人の異界観』 せりか書房 二〇〇六年
小松和彦 『異人論』 青土社 一九九一年
レヴィーストロース 『悲しき熱帯Ⅰ』 川田順造訳 中央公論新社 二〇〇八年
レヴィーストロース 『今日のトーテムズム』 仲澤紀雄訳 みすず書房 二〇〇〇年
レヴィーストロース・他 『サンタクロースの秘密』 せりか書房 一九九五年
レヴィーストロース 『レヴィーストロース講義』 川田順造・他訳 平凡社 二〇〇七年
諏訪春雄・他編 『訪れる神々』 雄山閣 一九九八年
中沢新一 『緑の資本論』 集英社 二〇〇五年
中沢新一 『対称性人類学』 講談社 二〇〇六年